

第 90 回関西実験動物研究会
彩る研究拠点—北大阪に注目

1. 国立循環器病センター研究所動物飼育施設の現状と展望

塩谷 恭子(国立循環器病センター研究所 実験動物管理室)

はじめに

平成 16 年度に国立循環器病センター研究所動物飼育施設の実験動物管理室長に着任した。経験や知識不足から、かつての利用者の立場からでは見えなかった多くの問題に遭遇することとなった。管理者の視点であらためて状況を把握し直し、最近漸く前任者の苦勞の一端が見えつつあるように思う。

当センターは病院と研究所からなる。研究所の基本計画は、遺伝子医学、移植医療、画像評価法、脳、心筋保護、人工臓器、再生・再建医学である。動物飼育施設は研究所の研究部門に属し、研究施設 5 棟に分散している。飼育施設の中心は研究所本館 7 階にあり、床面積 1400m²に、コンベンショナルな動物を中心に 15 飼育室、13 動物種、6000 頭を飼育し一部に SPF 施設を有する。バイオサイエンス棟では 2000 匹の遺伝子改変マウスを SPF の状態で飼育している。RI 施設である先進医工学センターでも少数の動物が飼育されている。

スタッフは職員 1 名と動物飼育委託業者 13 名で、1 名の実験動物 1 級技術師と 6 名の実験動物 2 級技術師が含まれる。一部の施設は動線上の問題から直接管理は行っていない。

現状と対策

かつては大動物が主に使用されていたが、最近ではマウスを用いた研究が増加し、SPF を維持するための工夫が必要となるとともに、施設の老朽化も進行している。そのため、

1. 建物や設備について
清浄区域と汚染区域の再配置や室圧制御のための空調の改修
2. 微生物管理について
施設にあった SPF 維持の方法を再構築
3. 飼育作業について
微生物管理の強化に伴う作業内容の変更と飼育管理仕様書の見直しを順次行ってきている。
4. 今後の問題点

今後の法律の強化に伴い、いかに対応していくべきか経験が少なく、わからない点が多い。今後は研究会に積極的に参加し、知識、技術を増してゆきたい。